

Title	シカゴ学派の展開 : クリフォードR.ショウの研究を中心として
Author(s)	玉井, 眞理子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42232">https://hdl.handle.net/11094/42232</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	たま い ま り こ 玉 井 眞 理 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 1 6 3 9 8 号
学位授与年月日	平成13年3月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	シカゴ学派の展開 —クリフォードR.ショウの研究を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 池田 寛  (副査) 教授 近藤 博之 教授 菊池 城司

#### 論 文 内 容 の 要 旨

社会の現実を「知る」には、いかなるアプローチが有効なのであろうか。これは今日もっとも注目され、議論されているテーマの一つである。というのも、かつて考えられていたよりも社会的現実が多層的で、複雑で、とらえがたいものである、ということが強く認識されるようになってきているからである。このような認識に立つとき、社会調査において必要となってくるのは民族誌的方法である。民族誌的方法とは、調査者が具体的な地域におもむき、個人記録を収集したり参与観察を行なって、文化のテキストを読み、記述するという調査法を指している。

社会学をアメリカで最初に制度化し、また同時に民族誌的方法を社会学的アプローチとして定着させたのは初期シカゴ学派であった。社会学的アプローチは、少なくともアメリカにおいては、社会改良の試みの中で誕生し、展開されていった。アプローチそれ自体が、当時のシカゴに生じた急激な社会変動によって引き起こされたさまざまな社会現象に対応する試みであった。民族誌的方法の発展を基礎づけたのは、社会制御に対する関心だったのである。つまり社会を改良するためには、変革の必要性を世間や行政に訴える必要があった。そこで採用されたのが、都市社会の問題状況を記述する民族誌的方法だったのである。初期シカゴ学派の多くの社会学者たちは、人々の生活に密着した記録を収集し、都市スラムにおもむいて人々の暮らしぶりを観察し、さらにはそこに生きる社会的に不利な人々、たとえば移民や非行少年のおかれた具体的な状況をとらえた。そうすることによって目指されたのは、社会問題の解決であった。

初期シカゴ学派は以上の歴史的社会的背景のもとに民族誌的方法を採用したが、生活記録を社会学的資料としたり参与観察を行なうことの有効性と限界を考慮しつつ、社会学的客観性の確保に専心している。そこでそうした確保の戦略を、一連の初期シカゴ学派の社会学者の業績にみいだすことができる。例えばシカゴ学派第一世代を代表するトーマスとズナニエツキは、「態度」と「価値」という概念から、人間の行為に結びつく「主観性」と「客観性」の双方をとらえようとした。ショウは生活史研究で own story という客観的な個人記録の収集を行ない、一層の信頼性を与えるため、それを事例史の一部として他のさまざまな資料（数量的データも含む）とともに提示した。その後ヒューズは調査対象の幅を広げ、「集団パースペクティブ」や「学生文化」、「組織」といった分析のカテゴリーを用いて現実の日常生活から離反しない範囲での抽象化を行った。こうしたアプローチの社会学的展開が明らかにされた。

本博士論文ではシカゴ学派社会学者の中でも特にショウの研究に注目するが、それはショウの研究が、これまで生活史法のなかでも記録の厳密な収集法についてまっぴら議論されるに留まっていたからである。しかし提示の技法も

またデータの高い客観性を保証する要素として注目されるべきであるし、ショウが研究の中で採用している「実験的方法による問題解決（＝非行少年の更生）の実践」も見逃してはならない。ショウの一連の研究が全体として理解され、その意義が適切に評価されるためには、これまで十分に考察されていない要素、また生活史研究以外の著書で展開されるアプローチ法をも網羅的に取り上げ、その全体から考察を加えた。

### 論文審査の結果の要旨

初期シカゴ学派の一人である Clifford Shaw に焦点を当て、かれの研究成果を初期シカゴ学派の発展を背景に丹念に紹介した論文である。

ショウは、非行研究の先駆的開拓者として知られているだけでなく、かれの代表的著作である『ジャックローラー』は、生活史法アプローチの代表的な文献としてアメリカの大学では非行研究に限らず、社会調査法のコースでも必読文献に上げられているものである。このようにすぐれた古典であるにもかかわらず、専門的な用語が多く用いられていることや、非行少年であるスタンレーの語りを中心に構成されたものであることから、我が国では翻訳の日の目をみる事がなかった。玉井は、この著作の翻訳に取り組み、難解な文章を見事に翻訳するという仕事を行っている。

博士論文では、このショウの業績を詳細にわたって紹介している。独創性に欠けるといふきらいはあるが、日本ではほとんど紹介されることがなかったショウの研究の実像を正確にとらえ忠実に紹介した点は評価できる。特に、主人公であるスタンレーの「状況の定義」や「自己定義」を追跡することにより、非行の深化のミクロな過程を明らかにしている。また、「自己の物語」にもとづく質的研究だけでなく、ショウが非行発生の生態学的なアプローチも併用していた点を指摘し、従来質的研究として注目を集めがちなシカゴ学派が、対象を全体的にとらえるために質的アプローチと量的なアプローチを結合していた点を明らかにした。トマス、ミード、バージェスらの先達の研究がショウの研究にどのように受け継がれたのか、また、かれの業績がセカンド・シカゴ・スクールにどのような影響を与えたのかについても、考察を展開している。

公聴会では、論文構成や文献研究に対する姿勢などについて意見や質問があった。それらに対して適切な答えをし、論文テーマについて十分な理解がなされていることが確認された。

これらの結果を総合的に判断し、本審査委員会では本論文を博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。